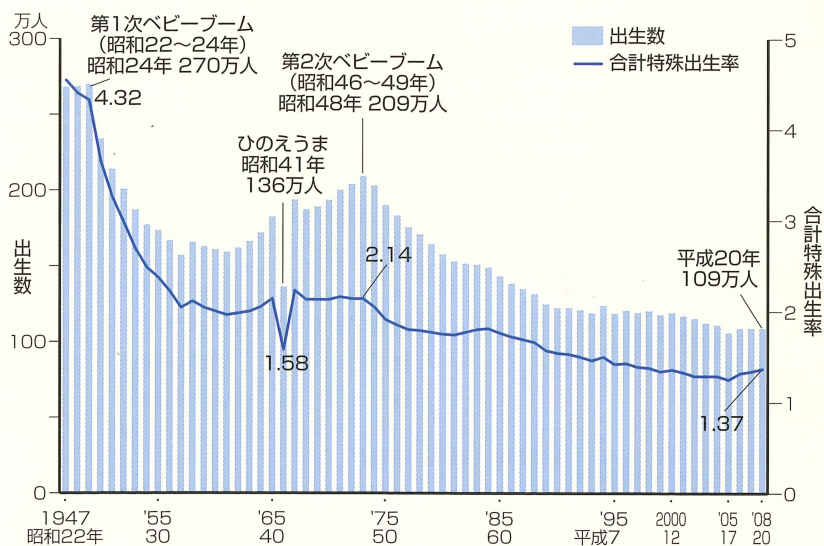


## 2-6 出生—合計特殊出生率

### 1人の女性の平均出生力は1.37人



資料 厚生労働省「人口動態統計」

出生数の推移をみると、ベビーブームの第1次（昭和22～24年）で年間260万人以上、第2次（46～49年）で200万人以上の2つの山を経て、減少傾向である。合計特殊出生率は出生力の主な指標で、その年次の年齢別出生率が続くと仮定した場合に1人の女性が生涯に生む子ども数を意味する（期間合計特殊出生率ともいう）。約2.1を下回った状態が継続すると、長期的には人口が減少する。昭和22～49年（41年の「ひのえうま」を除く）は2以上であったが、50年以降は低下傾向。平成20年は1.37で過去最低だった17年から3年続けて上昇した。1人の女性が生涯に生む女子人数を意味する総再生産率と、出産年齢までの生存確率が考慮された純再生産率は、平成19年はそれぞれ0.65と0.64であった。

欧米の多くの国でも、合計特殊出生率は1965年以降低下していたが、フランス、スウェーデン（2007年）、イギリス（2006年）は近年緩やかに上昇して1.85～1.98、米国（2006年）は2.10で比較的高い。ドイツとイタリア（2007年）はそれぞれ1.39と1.34で低い。

参照：本編45～49頁（第2編第2章 1.出生）